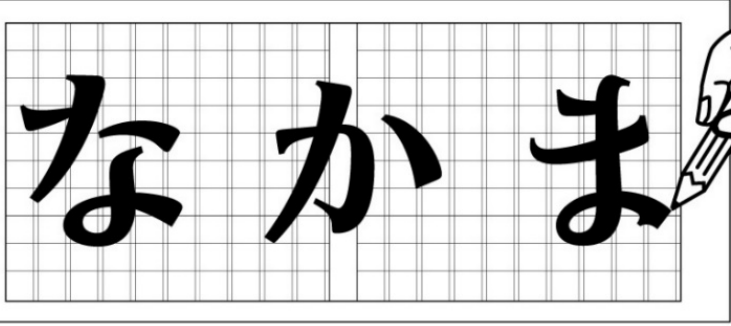


No.521

皆さんの投稿でつくられる情報紙



発行 佐倉市立中央公民館  
 編集 なかま編集委員会  
 (佐倉市民カレッジ生と卒業生で構成)  
 〒 285-0025  
 佐倉市 錦木町 198-3  
 電話 (043) 485-1801  
 FAX (043) 485-1803  
 メールアドレス  
 chuo-public@city.sakura.lg.jp

## こどもの感性

1歳の孫が抱っこされて家に現れた。男の子である。

初めての大人の顔を見るとピッピッと泣く。抱っこしても泣きべそである。まるで異次元の世界から来た小さな怪物である。周りの顔色や動きを感覚で見定めている。娘の店では知らない人の出入りが多く、慣れているはずだが。



## 吉崎 隆(城内町)

私が座って顔をじつと見てみると、部屋の隅に行ってちらちらと見ながら、めそめそしている。

そしてそこらにあるお気に入りものものを口の中に入れて心を落ち着かせている。お気に入りのハーモニカで息を吸う様に音を出す。この音も安心感を呼び起こすらしい。落ち着いてくると、自分でよちよちと歩いてみる。

一緒に外に出てやると、下り坂に向かい、自然とバランスよくゆっくりと歩いて行ってしまう。坂道のわずかに勾配の変化している所で、バランスをとりにくいのか座りこむ。見えない勾配を感覚でつかんで学習しているのだ。母親が心配してそばに行く。それを待っている。

自分が好奇心をもって興味を引くものは一生懸命熱中するが、

新型コロナウイルスのため  
しばらく休刊いたします

新型コロナウイルス感染症のため、令和2年度の市民カレッジは休講となりました。

市民カレッジ生による『なかま』編集委員の会議も定期的に集まるのが難しく、『なかま』は市民カレッジが通常どおりに再開されるまで、しばらく休刊いたします。

飽きるのも早く、人目を気にしないようだ。

嫌なものを見ようとしないのか、母親に助けを求めて片方の目でちらちらと見ながら泣く。

抱っこされて自分の好きな居心地の良い世界に浸り、目の前に現れた奇怪なものとの比較をしてじつと判断をしているようだ。この時間がきつと子供の感性を成長させているのだろう。

## 上七軒を訪ねて

かみしちけん

上七軒は北野天満宮の東に位置する京都最古の花街で、その由来は15世紀半ば室町時代にまさかのぼる。北野天満宮が焼失した際に、その再建に用いた木材の残りで茶屋を建てたことが始まりとされる。上七軒の「上」は御所よりも北であることをあらわし、武家と公家が密談を交わした舞台が七軒の茶屋であった。現在の上七軒のメインストリートには電柱がなく、夕方軒々に団子をあしらったちようちんに火が入ると、時間が一気に数百年遡り、京町屋と相まって幻想的な風景が醸し出される。

私が初めて上七軒に行ったのはいまから60年ほど前で、1歳年上の従兄を訪ねた時であった。従兄は北野天満宮の東側、社家長屋町に住んでいたため、おのずと上七軒を訪れることになったのである。しかし、十数年前従兄はクモ膜下出血を発症し、血管性認知症の症状が残った。

一昨年も従兄を訪ね昼食をとりにしたが、1時間ほど同席していたものの、先に帰宅してしまっただけである。また話題も非常に限られていた。昨年初めよりリハビリに言い始めたというので、多少はよくなったかな、と淡い期待を込めて秋を訪ねたところ、なんと昼食と食後のコーヒーまで合わせて3時間にわたって、あれこれ話が途切れなかった。幼馴染の従兄の認知症が快方に向かう。これは兄弟のいない私にとつて何よりもうれしい出来事だった。

今年も京都を訪ね、従兄とともに夕暮れの上七軒を散策したいと願っている。

(ユーカーリが丘 清水 良郎)

## 歴史を彩った

### 「ハプスブルク家」

1月5日から佐倉市立美術館で開催された新春佐倉美術展。佐倉に移ってからは、毎年楽しみに出掛けている。帰り際「ハプスブルク展」のパンフレットを目にした。表紙は愛くるしい少女の肖像画。生まれながらの許嫁マルガリータ王女とある。

瞳のくつきりした鼻筋の通った聡明な顔立ち。細く柔らかなブロンドの髪の毛。両頬は赤味をさし、唇はオレンジ系の赤のルージュ。光を放つ青色のピロ

ード地の貴族ドレス。胸元と両袖には当時の最高級の王宮レースが贅沢にあしらわれている。胸の中心には、ドレスの共布で縁取った天然石のブローチ。その視線は純粋で揺ぎなく、気高い。私は王女の一族「ハプスブルク家」に興味を湧いた。早速、上

野の国立西洋美術館に足を運んだ。

13世紀末から18世紀にわたる、ヨーロッパを中心に君臨し続けた「ハプスブルク家」。第一次世界大戦後に終焉を迎えるまで、オーストリアを拠点に広大な帝国を築き上げたヨーロッパ随一の名門である。

美術館内は平日の雨模様にもかかわらず、大変混雑している。600年にわたり収集された帝国コレクション。世界屈指の絵画の数々は、煌びやかな色彩表現で描かれ、高貴で卓越したものだった。

マルガリータ王女の肖像画の前に立つ。瑞々しい姿。16歳でスペインからオーストリアに嫁ぎ、僅か21歳で人生を終える。余りにも短い一生ではあるが、宮廷人として必要な幸せは、十分に手に入れたに違いない。

(鍋山町 榊原 慶子)

## 瀬戸内海しまなみ海道 サイクリングの旅

昨年の9月24、25、26日、自転車仲間3人で瀬戸内海しまなみ海道サイクリングに行きました。

台風15号一過の晴天の下、羽田空港から広島空港、バスで尾道駅へ。尾道を観光しロードバイク（ドロップハンドルの自転車）を借りてホテルに向かいました。

翌25日は尾道から瀬戸内海の島々を結ぶ七つの大橋を渡る70<sup>キ</sup>、8時間のコースをサイクリングしました。

島から橋への上り坂は厳しかったが下り坂や島内は快適に飛ばしました。瀬戸内海の景色は素晴らしく綺麗で、特に四国今治に渡る全長4<sup>キ</sup>、世界初の三連吊り橋の来島海峡大橋からの海峡は絶景でした。

今治駅で自転車を返し、バスで

奥道後温泉ホテル「老湯の守」に行きました。露天風呂で疲れを癒し、飲み食べ放題のバイキングに満足しぐっすり眠りました。

最終の26日はバスで道後温泉へ行き、温泉街を散策し、松山城を見学後、広島空港から羽田空港に帰りました。

天気にも恵まれ瀬戸内海と四国の景色と温泉、美味しい料理を満喫した仲間達との楽しい旅行でした。

（表町 行方 富士夫）



## ツバメの恩がえし

10年以上も前の話です。いつもの様に通勤バスに乗るためバス停に向かうと、同僚が通りにある医院の玄関先に何か動く物を見つけた。近寄って見ると生まれたばかりのツバメのヒナがバタバタしていた。そっと拾い上げ、軒先を見るとヒナが2、3羽、餌を運んでくる親を待っている。誤って落ちたヒナを元に戻してやろうと、10<sup>リ</sup>程離れた自宅から脚立を持って来て、落ちたヒナを仲間の巣へ戻した。朝から良い事をしたと内心うれしかった。翌朝、又、下に落ちていた。さわって見ると動かない。家に持ち帰り、何処かに埋めると言ってバスに乗り込んだ。会社へ着く間、昨日とは違って気は晴れなかった。弱いヒナを仲間が落としたのだ。

翌年、我家の玄関が騒がしい。

（本町 沢田 泰訓）

ツバメが軒先に巣を造り始めた。うれしくて舞い上がった。さて医院の方は、巣はあれどツバメは見えない。もしかして、去年の僕の行動を見ていた？ 翌年も次の年も来る様になった。

7年位経った夏、近所の人達とガレッジでバーベキューをした。翌朝、今にも巣立ちしそうだつた4羽と親がいない。無神経にも巣の下でバーベキューをするなんて。どんな思いで逃げていったのか。

こなくなつて5年位、隣家に巣を造り始めたと言う。内心、この裏切りツバメめ、どうして隣りなんだ。明くる日から巣造りをやめて何処かへ行ってしまった。

それから3年、平成30年、我が家に戻って来た。大喜びしたのも1年だけ、昨年は来なかった。令和になって二度目の春、今年こそはと心待ちにしている。

## なかま編集委員会

この情報紙『なかま』は、皆さんの日々の暮らしの様子などを綴った投稿をもとにつくられています。発行するにあたり、編集や校正は、佐倉市民カレッジ生で構成されている「なかま編集委員会」が行っています。

佐倉市民カレッジは、佐倉市立中央公民館が主催している、全国でも珍しい四年生の市民大学です。そのなかで各学年から「なかま編集委員会」として選ばれた方たちが編集委員会を担っています。編集委員の仕事は、どの投稿を掲載するかを決め、原稿を読み合わせしながら確認することから始まります。

表記の統一や、わかりにくい表現の手直しなどを行い、投稿者の伝えたい文意を損なわないようにしながら、読んでいてわかりや

すい表現になるようにしていきます。普段なにげなく使っている表現でも、漢字はこれで正しいのか、この表現は間違いではないのかなどを確認していくと判断に迷うこともあり、編集委員会で議論になることもあります。こうした校正作業を、発行する前に月に2回集まって行っています。

このほかに、編集委員としてエッセイを書いています。編集委員の皆さんは、最初は書けないと言いますが、いざ書いていただくのと読み応えのあるエッセイができてきあがってきます。

こうしてできあがった『なかま』を読んでいると、皆さんが普段の暮らしのなかで感じていることを垣間見ることが出来ます。『なかま』を手にとった皆さんも、読んで励まされたり、暮らしの中での楽しさを共感していただけばと思っています。

（大佐倉 河村 淳司）

## 編集委員エッセイ

### 花から元気を

明けて令和2年、ちよつと嬉しいことがありました。

花が好きとは言え、花鉢を買っては枯らす事の繰り返しが常でした。そこで、小さな花壇を作り友人から戴いた丈夫な花を少しずつ植え、好きな花鉢も増やして、今は楽しんでいきます。

5年前よりサンパーチェンス（インパーチェンス）の苗を買って、毎年30鉢の鉢に植え、11月の末ごろまで咲かせます。色合いは4色あり、昨年は赤を植えました。でも、花付が悪く、思い切って短く切り戻しをしてみたところ、10月の末になって蕾をつけはじめました。日ごとに寒くなってきたので室内の温かい場所に置いて水やりをしました。お正月も過ぎましたが、なんと、お正月も過ぎて2月に入ろうとしても健気に

咲いています。

こうなると1年中咲いて欲しいと思うようになり、水やりにも前にもまして気を使い、花に「綺麗に咲いたね」と、声かけするようにしました。

初めての試みでもあるので、喜びを感じながら、そして愛でながらのひと時を過ごしています。  
（米井 鈴子）



休刊中も投稿原稿は

引き続き募集いたします

日常で気付いたことなどを「随意にお書きいただきお送りください」（送付先は1ページ右上参照）。字数は590字（14字×42行）程度です。掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます（ご要望がございません）。